

（論文博士）（様式 8）

石川純子氏から学位申請のため提出された論文の審査要旨
題目

主論文：

Feelings experienced at hospital admission by Inpatients Involuntarily Admitted Under Japan's System of Psychiatric Care

（日本の精神科医療における非自発入院を体験した患者の入院時の思い）

The Kitakanto Medical Journal (in press)

Junko Ishikawa, Michiyo Oka, Ai Yokomizo, Reena Shiotsuki,
Akiyoshi Nishiyama

副論文：

群馬大学大学院保健学研究科博士後期課程単位修得退学者に対する論文審査基準の特例に関する申し合わせにより、副論文はなし

論文の要旨及び判定理由

主論文

日本の精神科医療の特徴の一つとして、諸外国と比べて非自発入院が多いことが挙げられる。欧州では非自発入院の割合が12.1%であるのに対して、日本での非自発入院の割合は33%と高く、近年増加傾向である。海外では非自発入院に関する患者の認識に関する研究が行われ、多くの患者が不本意に入院したことを自分で自覚していることが明らかになっているが、日本においては非自発入院を体験した患者の入院時の思いをまとめた報告はない。非自発入院時の患者の思いを明らかにすることは、非自発入院の入院プロセスの改善や看護援助の充実に繋がると考え、本研究では非自発入院を体験した患者の入院時の思いを明らかにすることを目的とした。非自発入院（医療保護入院あるいは措置入院）を体験した20歳以上の入院患者12名（男6名、女6名）を対象に半構造化面接を実施し、質的記述的方法を用いて分析した。患者の語りから、非自発的入院を体験した入院当時の思いは【入院よりも大切な日常生活や仕事がある】【家族に騙されることによる驚きと憤り】【感情に任せた自身の行動に対する自覚】【目には見えない外力に対する諦めと覚悟】【医療関係者からの入院時説明が受けれがたい】の5カテゴリに集約された。非自発的入院を告げられた患者は、自分自身の状況を自覚しつつ入院治療については諦めや覚悟があることが本研究によって初めて明らかになった。また、非自発的入院は家族や医療関係者への不信感を生じさせることより、患者、家族、医療関係者間のコミュニケーションの重要性が改めて確認された。以上より、本研究の成果は精神科医療における入院時の意思決定支援に活かされると期待される。したがって、本研究は今後の保健学の発展に寄与するものと認められ、博士（保健学）の学位に値するものと判定した。

審査委員

主査	群馬大学教授 (保健学研究科) 看護学講座	大山良雄	印
副査	群馬大学教授 (保健学研究科) 看護学講座	近藤浩子	印
副査	群馬大学教授 (保健学研究科) 看護学講座	近藤由香	印

参考論文

1. わが国における非自発入院に関する研究の動向と今後の課題
精神科看護 46: 062-070, 2019
石川純子, 横溝愛、塩月玲奈, 西山晃好